

一年保育児と二年保育児の比較

大阪樟蔭女子大学児童研究所

大西 憲明
尾田 郁子
黒崎 牧子
木股 晴子

目的 幼稚園で、二年保育児の二年児と一年保育児とを同様なカリキュラムで指導したり、両群を混合して保育する場合には、種々の問題が起りやすい。従って、一年間の保育経験をもった幼児群と新入園一年児群との指導を変えねばならないが、どういう点に着目し、これに基いた指導をどう展開すればよいかは、容易に解決できない問題であろう。つきに、この問題に接近するための予備として、両群の差異的特徴をまず抽出しようとした。

方法

(一)居住地域の異なる幼稚園、二園を選び、各園について、一年保育児と二年保育児群につき、田研式家庭環境診断テストを実施して、両群の環境条件の等質なものを選びだした。この場合のテストは母親の評定結果を保育者がさらに検討して修正した得点で算出した。(二)この家庭水準で略等しい両群に、さらに阪本D式知能検査を実施して、知能水準の等しい集団の両群にまで構成した。即ち、家庭的要因、知能的要因を等しくした場合の一年保育児と二年保育児の対に、次の三面から検討しようとした。(三)牛島式社会的生活能力検査を実施したが、両群に有意差が認められなかった。(四)桐原式人物画を実施したが、この場合にも、両群間に有意差が認められなかった。(五)保育者に、幼児が描いた自由画を、三段階に評定してもらったもの

のについて、その分布を両群で比較したが、有意に二年保育児群に優れていると評定されたものが多かった。(六)さらに前記知能検査の下位問題について両群を比較したが、二年保育児が有意に得点の高かったものは、系列問題と生活常識の問題のみであった。

結論と考察 以上の結果では二年保育児は、一年保育児よりも生活常識が優れ、知能とは異った描画的表現のうまさ認められた。勿論ここで用いたのはベーパー式知能検査と、評定式検査であり、一般的傾向の抽出を狙った整理の結果である。さらに、具体的な事態における問題解決のしかた、情意的傾向、社会的交渉性についての検討は残されている。

(大会発表論文抄録73—74頁)

在園時の記録と進学後の傾向

(第二報)

神田寺幼稚園

高園 敏子・石村 紀子
福永かをり・坂上 徹子
深野 浩代・高木喜代子

目的 在園時の評価と進学後の学業成績・行動記録を比較調査して、今後の保育の参考とする。

対象 神田寺幼稚園卒業生 六年二二名、五年二四名、四年二一名、三年一九名、二年一四名、計一〇〇名。

参考資料 1、在園時の知能テストの記録、2、在園時の生活の記録及び指導要録、3、小学校児童指導要録、4、小学校担任の評価調査方法及び考察 1、在園時の知能テスト(WISC)を、言